

ポール・グライスから遠く離れて —「協調の原理」で読むシェイクスピア作品の会話—

遠藤 泉

序論

哲学者であり、言語学者であるポール・グライス (Paul Grice, 1913-1988) は、論文「論理と会話」(“Logic and Conversation” *Studies in the Way of Words*, 1989 所収) の中で、「協調の原理」(Cooperative Principle) について述べた。会話を協調的な行為とし、会話者が期待される原理を定式化することが出来るとした。会話の段階・目的・方向を踏まえ、主題に適った発言をするべきであるとした。これを「協調の原理」(グライス 37) と呼んだ。この会話の原理を 4 つの公理 (Maxim) に分類し、「量 (Quantity)」、「質 (Quality)」、「関係 (Relation)」、「様態 (Manner)」とした。この「協調の原理」の 4 つの公理の遵守は会話の基本と捉えることが出来る。普段の会話では、何か・誰かについて配慮したり、口止めされていたり、意図的にこの原理が遵守されない場合がある。また、話癖があったり、基準が違ったり、意図的でなくこの原理が遵守されない場合もある。話し手の言葉がこの原理から離れる場合、聞き手に混乱を招くと考えられる。この場合、直接言葉には表われていなくとも「協調の原理」が働いていることを前提とすると、話し手の意図を推測出来ることがある。含意 (Conversational implicature) つまり、付随的に伝えられる意味 (ルール 159) を推測するのである。

グライスの分析への批判者としてはノーム・チョムスキー (Noam Chomsky, 1928-) がいる。チョムスキーは、言語を何らかの目的を達成する為の手段と考える道具的分析は不適当なものとした (チョムスキー 100)。彼は、言語は本質的に思考を表現するための体系であるという伝統的見解に同意していた (チョムスキー 81)。また、グライスの分析を発展させたディアドリ・ウィルソン (Deirdre Wilson, 1941-) とダン・スペルベル (Dan Sperber, 1942-) が

いる。彼らは関連性理論の創始者として、グライスの推論的語用論を認知的な方向へ展開した（ウィルソン、ウォートン 57）。

本稿では、「協調の原理」から話し手の言葉が離れた場合の会話に焦点をおき、「協調の原理」の4つの公理について話し手が遵守していない会話をシェイクスピア作品からそれぞれ例を取りあげ、現実の会話と想定した場合と文学作品の中の会話と捉えた場合と、それぞれ考察を行う。公理を遵守していない会話の例を取りあげることで公理の効用（必要性）と言葉の効果（影響力）をみる。現実の会話と想定した場合では、話し手の言葉が「協調の原理」の4つの公理から離れる程聞き手に混乱が生じ、コミュニケーションの成立に困難を伴う。文学作品の中の会話と捉えた場合では、私たちは聞き手とは違う読者という位置に立ち、聞き手に同調しながらも会話を俯瞰することが出来る。これらのことを本稿で確認していく。第1節ではグライスの「協調の原理」についての概要を示す。第2節では「協調の原理」の4つの公理である「量」、「質」、「関係」、「様態」のそれぞれについて話し手が遵守していない会話の例をシェイクスピア作品から取りあげ、現実の会話と想定し、考察を行う。第3節では第2節で取りあげた例を、文学作品の中の会話と捉え、その考察を行う。

第1節 グライスの「協調の原理」

オックスフォード大学が世界の哲学の中心地と見做された時期、その中心人物はジョン・ラングショー・オースティン（John Langshaw Austin, 1911-1960）であった。彼のグループは「オックスフォード日常言語学派」の中心を成していた。グライスもこのグループに属し、オースティンの部屋で行われた「サンデー・モーニング」のメンバーでもあった。オースティンは「日常言語はすばらしく精巧な道具だ」という言語観をもち、「サンデー・モーニング」はメンバーたちによる日常言語の共同分析の場であった。¹ 言語哲学において大きな影響を及ぼしたグライスの会話についての理論は、ここでの作業から始まったと言える（グライス 356-57）。

コミュニケーションとは「気持ちが通じ合うこと」、「心が通い合うこと」（小

島3)であり、その為には会話者同士の協調が必要となる。会話者同士が抱く協調における通常の期待を、グライスは定式化し「協調の原理」とした。

会話の中で発言をするときには、それがどの段階で行われるものであるかを踏まえ、また自分の携わっている言葉のやり取りにおいて受け入れられている目的あるいは方向性を踏まえた上で、当を得た発言を行うようにすべきである。これを協調の原理 (Cooperative Principle) と呼ぶことができよう。(グライス 37)

「協調の原理」は4つの公理に分類される。

「量」1. 要求されただけの情報量をのべること。2. 要求された以上の情報量を述べてはならない。

「質」真実を述べること。1. 偽だと思ふことを述べない。2. 十分な根拠のないことを述べない。

「関係」関連のあることを述べること。

「様態」理解しやすく述べること。1. 曖昧な表現を避ける。2. 多義的な表現を避ける。3. 簡潔に述べる。4. 整然と述べる。(Yule 37, 参照)

日常的な会話では、話し手の言葉が不十分・不適切な場合でも、「協調の原理」は守られているとの前提により話し手の意図している意味を推測することがある。例えば、

Charlene : I hope you brought the bread and the cheese.

Dexter : Ah, I brought the bread. (Yule 40)

という会話において、表面的には Dexter は Charlene の質問に十分には答えていない。「質」、「関係」、「様態」の部分に問題はないが、「量」に関してはチーズへの言及が無く不十分な返答と見做される。しかし、「協調の原理」は守られている前提なので、Charlene は推測を行う。“He must intended that she

infer that what is not mentioned was not brought.” (Yule 40) Dexter には、Charlene が推測すること、すなわち「チーズは持参しなかった」と判断すること、を期待する意図があるのである。含意は「協調の原理」は守られているとの前提において、「協調の原理」が遵守されないことにより出て来るものと言える。

第2節 シェイクスピア作品と4つの公理との考察

本節では、「協調の原理」における4つのカテゴリー「量」、「質」、「関係」、「様態」を話し手が遵守していない会話の例をシェイクスピア作品からそれぞれ取りあげ、現実の会話と想定し、その考察を行う。公理を遵守していない会話の例を取りあげることで公理の効用（必要性）と言葉の効果（影響力）をみる。例にあげた会話の話し手は意図的に言葉を使い公理を遵守しない、あるいはずらして使用している。

(1) 「量」：必要とされている量の情報を伝える。『ハムレット』 (*Hamlet*, 1600)

デンマーク王国のエルシノアの城では、衛兵たちが先王の亡霊を目撃していた。王子ハムレットは父王の亡霊に、自分を暗殺した現王に復讐をして欲しいと告げられる。狂気を装い復讐の機会を待つハムレットに、先王の代からの廷臣ポローニアスが狂気の原因を探るために近づく。

ハムレットの乱心の原因を突き止めたという廷臣ポローニアス。王の死と、自分と義弟との急ぎすぎた結婚以外に原因は思い当たらないという王妃ガートルード。新王クローディアスは、自分の娘オフィーリアへの恋ゆえの乱心であると主張するポローニアスに真相を探ることを許す。

Ham. …—Have you a daughter?

Pol. I have, my lord.

Ham. Let her not walk i'th'sun. Conception is a blessing,
but as your daughter may conceive—friend, look
to't.

Pol. [aside] How say you by that? Still harping on my daughter. Yet he knew me not at first; a said I was a fishmonger. He is far gone. And truly in my youth I suffered much extremity for love, very neat this. I'll speak to him again. – What do you read, my lord?

Ham. Words, words, words.

Pol. What is the matter, my lord?

Ham. Between who?

Pol. I mean the matter that you read, my lord.

(Ⅱ . ii . 182-95 下線筆者)

城内の大廊下。本を読みながら歩いて来たハムレットにポローニアスは話しかける。ハムレットの狂気を確信したポローニアスは、何を読んでいるのかと再び話しかける。“Words, words, words.”というハムレットの返答は、偽りではなく、はぐらかしてもなく、曖昧でもない。「質」、「様態」は「協調の原理」に準じている。「関係」も、何の本を読んでいるのかと問われていたのだとしても、「読む」ものは詩でも戯曲でも歴史書でも“words”で書かれていると考え、準じてはいることになる。だが、「量」に関しては必要とされている情報量を満たしていない。ポローニアスは当然「協調の原理」が遵守されていることを前提に含意を推測するが、情報量が少なすぎて含意の推測が出来ない。情報量が少なすぎると含意の推測可能な範囲が広すぎてしまうのである。ポローニアスは2つ目の質問でどんな内容なのかを聞くことになる。逆に、情報量が多すぎる場合はどうであろうか。ポローニアスは推測の必要はなくそのまま情報を受け取るか、もしくはハムレットが何か不具合あるのを隠そうとしているのかと勘繰るかもしれない。ハムレットの返答が、“I read Holinshed's *Chronicles of England, Scotland, and Ireland.*”²であったなら「協調の原理」の「量」にも準じているため、ポローニアスは混乱することもなく、含意を推測することもない。現実の会話の返答として申し分ないことになる。

(2) 「質」：真実であることを述べる。『オセロー』 (*Othello*, 1603-4)

ムーア人の将軍オセローはヴェニスの元老院議員の娘デズデモーナと結婚する。オセローの下で旗手として働くイアゴはオセローを憎んでいる。“I hate the Moor; my/cause is hearted,” (I . iii .365-66) と言い奸計を実行に移していく。

将軍オセローへの旗手イアゴの憎しみは深い。オセローが副官にキャシオーを任命したことや女房エミリアをオセローに奪われたらしい世間の噂に対して、副官キャシオーの地位を奪い、オセローの妻デズデモーナの貞節を危くするか少なくともオセローを激しい嫉妬にとりつかせるという企てを実行することにする。イアゴの奸計にはまり地位を解任されたキャシオーは、イアゴの勧めでデズデモーナにオセローとの執り成しを頼みに来る。イアゴはオセローにその帰りを目撃させる。妻といた男がキャシオーではないかというオセローに、“...That he would sneak away so guilty-like,/Seeing you coming.” (III . iii . 40-41) という根拠のない言葉を聞かせ疑惑を煽る。次に、話し手が公理に配慮していることを聞き手に伝えるための保護策 (Hedges)³ (Yule 38-39) を使い、「質」において不確かなことは言わない配慮をしているかのように演出する。公理への限界を前置きすることで、イアゴは信用できる話し手という役を演じる。更に、根拠のないことを事実と組み合わせて真実であるかのように思わせていく。

Iago. I am glad of it, for now I shall have reason
To show the love and duty that I bear you
With franker spirit: therefore as I am bound
Receive it from me: I speak not yet of proof;
Look to your wife, observe her well with Cassio;
Wear your eye thus, not jealous, nor secure.
I would not have your free and noble nature
Out of self-bountry be abused, look to't:

I know our country disposition well;
In Venice they do let God see the pranks
They dare not show their husbands: their best
conscience

Is not to leave undone, but keep unknown.

Oth. Dost thou say so?

Iago. She did deceive her father, marrying you;
And when she seem'd to shake and fear your looks,
She lov'd them most.

Oth.

And so she did.

(Ⅲ . iii . 197-213 下線筆者)

“I speak not yet of proof” という保護策を使い、まだ証拠があるわけではないと「質」の公理への配慮を装うことでオセローの信用を自分に向けさせる。そして、「質」においては根拠のない、火遊びは夫には分からないようにやるのがヴェニス女性の良心であるという話を、デズデモーナが父親を欺く形でオセローのもとに来た事実と組み合わせて話す。そうすることで、聞き手に両方の話が共に真実であるかのように思わせてしまう。証拠が欲しいというオセローにイアゴは、キャシオーが寝言で、“Sweet Desdemona, /let us be wary, let us hide our loves” (Ⅲ . iii . 425-26) と言ったと伝える。この言葉は「質」における完全な偽りであるが、すでにイアゴが話すことは真実であると思込んでいるオセローは、この言葉をあっさりと信じてしまう。“I speak not yet of proof” というイアゴの保護策の言葉は、話し手であるイアゴを信用させると共に、まだ証拠があるわけではない話をイアゴ自身は信じている、という含意を聞き手であるオセローに推測させる。

では、保護策を使わずに話した場合はどうであろうか。まだ確証があるわけではないことを断言するイアゴの言葉をオセローは警戒したであろう。だが、ここでは保護策がイアゴの思惑通りに作用する。ヴェニス女性の良心につい

ての話もそれだけならば、“Dost thou say so?”とオセローは応じているが、デズデモーナが父親を欺いた形で自分のもとに来たという事実と絡めて話されると、“And so she did.”と譲歩し、デズデモーナがヴェニス的女性の良心の持主であるという推測を事実として受け入れてしまう。最後にはイアゴの偽りの言葉を真に受けて激怒する。オセローにとってはイアゴの言葉は「質」を遵守していることとなりイアゴの奸計は成功する。

(3)「関係」:関わりのあることを述べる。『ウインザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*, 1597-8)

『ヘンリー四世第1部』*King Henry IV, Part1* (1596)、『ヘンリー四世第2部』*King Henry IV, Part2* (1597-8)ではハル王子(後のヘンリー五世)の放蕩仲間として登場する巨漢で大酒飲みの騎士フォルスタッフを主役に、エリザベス朝時代のイギリスの市民階級を描いた喜劇である。ウインザーにやって来たフォルスタッフが金も恋も手に入れようと企て、2人の夫人に同時に同じ内容の手紙を出すことから喜劇が始まる。

グロスター州の上席治安判事シャローは、無礼を働かれたとしてウインザーの市民ページの家に騎士サー・ジョン・フォルスタッフを探しに来る。

Fal. Now, Master Shallow, you'll complain of me to the
King?

Shal. Knight, you have beaten my men, killed my deer,
and broke open my lodge.

Fal. But not kissed your keeper's daughter?

Shal. Tut, a pin; this shall be answered.

(I . i . 101-06 下線筆者)

シャローはフォルスタッフの無法な行いについて並べたてる。彼は被害を受けた召使いと鹿と番小屋について話しているのだが、フォルスタッフが話すのは番小屋の娘についてである。フォルスタッフの返答は「協調の原理」の「関係」

に準じてはいないことになる。ただ、フォルスタッフは“*But*”と言っているの
でシャローの言葉を受けてはいることになり完全に「関係」ない訳ではない。
従って、シャローは「協調の原理」の遵守を前提に含意の推測を行うまでもな
くフォルスタッフの返答に‘*yes*’を読み取ることが出来る。この場合、フォル
スタッフは「協調の原理」の「関係」に準じたならば、“*Yes. I have beaten
your men, killed your deer, and broke open your lodge.*”と返答することにな
るが、“*but not kissed your keeper’s daughter.*”と付け加えることも可能であ
る。番小屋の娘のことはシャローには「関係」ない事柄であるが、なぜフォル
スタッフは“*But…*”と言及したのか。シャローはフォルスタッフの「した」こ
とを3つあげて非難する。フォルスタッフは‘*but*’を使い「しなかった」こと
を1つあげて弁明する。「しなかった」こともあるということでシャローの言
う程の悪人ではないということを暗示する⁵ことがフォルスタッフの‘*but*’の
意図であった。

(4)「様態」：明瞭で簡潔に述べる。『お気に召すまま』(*As You Like It*, 1599)

追放された前公爵の娘ロザリンドは、レスリングの御前試合の会場で出会っ
たド・ボイス家の三男オーランドーと一目で恋に落ちる。オーランドーの父親
である故サー・ローランド・ド・ボイスはロザリンドの父親である前公爵が目
をかけていた廷臣だった。試合の勝者となったオーランドーにロザリンドは
ネックレスを贈る。その後、ロザリンドは現公爵に追放されて、オーランドー
は長兄オリバーから逃れて、それぞれアーデンの森に入る。

ロザリンドは、森の中のあちこちの樹に自分のことを謳った詩がぶら下げら
れたり、彫り付けられたりしているのを見つける。誰がしたのかを知ってい
るらしい、従妹で現公爵の娘シーリアにそのことを尋ねる。

Ros. I prithee, who?

Cel. O Lord, Lord, it is a hard matter for friend to
meet; but mountains may be removed with earthquakes
and so encounter.

Ros. Nay, but who is it?

Cel. Is it possible?

Ros. Nay, I prithee now, with most petitionary
vehemence, tell me who it is.

Cel. O wonderful, wonderful, and most wonderful
wonderful, and yet again wonderful, and after that out
of all hooping!

Ros. Good my complexion! Dos thou think,
though I am caparisoned like a man, I have a doublet
and hose in my disposition? One inch of delay more is
a South Sea of discovery. I prithee tell me who is it
quickly and speak apace. I would thou couldst stammer,
that thou mightst pour this concealed man out of thy
mouth as wine comes out of a narrow-mouthed bottle
– either too much at once or none at all. I prithee take
the cork out of thy mouth that I may drink thy tidings.

(Ⅲ . ii . 178-97 下線筆者)

誰がしたことなのかを懇願して尋ねるロザリンドにシーリアは“wonderful”を繰り返す。「協調の原理」の「量」、「質」、「関係」においてその公理の範疇を越えた返答と言えるが、「様態」においても意味は明瞭ではなく表現は簡潔ではなく理解し難い返答と捉えることが出来る。ロザリンドはどの様に含意を推測するのだろうか。すでにシーリアから、“And a chain that you once wore about his neck—change you/colour?” (Ⅲ . ii .176-77)と言われたロザリンドは、ネックレスをしている人物を想定して顔色が変わったのだ。だが、ロザリンドの想定をシーリアはなかなか確定させてくれない。シーリアの返答が1回の“wonderful”ならばロザリンドは自分の期待通りであると推測する。“wonderful”が繰り返されることで確信に変わるが、それを確定出来ないもど

かしさが5回の“wonderful”で極まり、「あと少しでも焦らしたら南洋の海みたい荒れ狂うわ」とシーリアに訴えるのである。仏教哲学者である鈴木大拙(1870-1966)は、この“wonderful, wonderful, and most wonderful/wonderful, and yet again wonderful ...”の言葉に「妙」(鈴木107)をみた。創世記、第1章の“And God saw everything that he had made, and, behold, it was very good.”を引き「この平凡な very good が「妙」である」(鈴木106)とした。この“good”は善悪の善でもなく、好醜の好でもなく、「それ自身においてある姿そのもの」(鈴木106)であるとした。シーリアが“wonderful”という言葉で表現したかったのは、「素敵」、「不思議」、「驚き」、「素晴らしさ」、そして「申し分ない」ということではないか。シーリアの“wonderful”の意味するところは「妙」であり“very good”であり、つまりは「申し分ない」ということであると思える。

第3節 文学作品の中の会話

第2節ではシェイクスピア作品から取りあげた例を現実の会話と想定し、考察を行った。第3節では文学作品の中の会話と捉え、その考察を進める。「協調の原理」から離れた話し手の言葉は、聞き手の混乱を引き起こし含意の推測を行わせもするが、文学作品の場合では、私たちは読者という聞き手とは別の位置に立つ。読者という位置は、文学作品が上演された場合は観客という位置に、朗読された場合は聴衆という位置になる。いずれも聞き手とは別の第三者の位置である。本稿ではこの第三者の位置を読者に代表させて、考察を進める。

(1)「量」の公理で例として取りあげたハムレットの言葉“Words, words, words.”(Ⅱ . ii .192)については、読者はハムレットの言葉が狂気の演技の一部であると知っている。故に、ポローニウスがハムレットの返答に狂気を確信し再度質問している間、ポローニウスよりも混乱せず含意を推測することが出来る。

(2)「質」の公理で例として取りあげたイアゴの言葉“I speak not yet of proof ;/Look to your wife, observe her well with Cassio...”(Ⅲ . iii .200-01)

においては、イアゴの奸計を知っている読者は、イアゴが保護策を使い会話への配慮を示すのはオセローの信用を自分に向ける為であると理解している。そして、読者は保護策の効用が悪用されるのを目撃する。

(3)「関連」の公理で取りあげたフォルスタッフの言葉“*But not kissed your keeper's daughter?*” (I . i .105) に対しては、グロスター州の上席治安判事シャローは、フォルスタッフは返答を誤魔化そうとしたと怒りを現す。だが、『ヘンリー四世』でフォルスタッフの人物を知る読者にとってはフォルスタッフらしい言葉であると納得する。この作品で初めてフォルスタッフを知る読者には、劇の冒頭部分のこの言葉でフォルスタッフの人物を、一筋縄ではいかない人物であると推測する。

(4)「様態」で取りあげたシーリアの言葉“*O wonderful, wonderful, and most wonderful/wonderful, and yet again wonderful, and after that out of all hooping!*” (III . ii .186-87) においては、詩を書いたのはオーランドーであることを読者は知っている。従って、ロザリンドがシーリアの言葉の推測にもどかしさを極めている時、読者はまず言葉のリズムを楽しみ、それからこの言葉の解釈を愉しむ余裕を持つ。

読者は第三者である。聞き手の混乱や含意の推測に同調しながらも、会話を俯瞰することが出来る。コンテキストにおける読者の情報量は大概の場合に聞き手よりも多い。従って聞き手よりも混乱は起こらず含意の推測も深く出来るのである。聞き手のように話し手が意図して使う言葉の効果に翻弄されるのではなく、読者は特権的な位置に立ち能動的に「自分の解釈能力を発揮」(スコールズ 142) し言葉の効果を愉しむことが出来るのである。会話を俯瞰することで、「協調の原理」から離れた会話がある意味で愉しむことが出来る、それが読者の立場なのである。

結論

コミュニケーションにおいては、会話の段階・目的・方向に沿って話すという会話者同士の協調が必要であり、グライスの「協調の原理」の4つの公理

「量」、「質」、「関係」、「様態」の遵守は会話の基本と捉えることが出来る。本稿では、その基本から離れた会話に焦点をおき、シェイクスピア作品の中から会話の例を取りあげ、その言葉の考察を行った。第2節では作品から取りあげた例を現実の会話と想定し、話し手の言葉が公理の遵守という基本から離れる程、聞き手に混乱が生じ含意の推測を行うことをみた。本来は話し手と聞き手の共同の協調作業である会話が、聞き手側の負担が増し、「ていねいさの原則」(小島69)における基本的精神である「聞き手の負担をなるべく小さくし、利益をなるべく大きくする」ということに反するものになる。コミュニケーションが良く成立しているとは言えない。公理を遵守していない会話を取りあげることで、公理の効用(必要性)と言葉の効果(影響力)を認識することが出来た。話し手が意図して使う言葉により公理が遵守されない、あるいは公理がずらして使用されることで、コミュニケーションの成立を支える公理の効用(必要性)が認識され、また話し手が意図して選ぶ言葉によりコミュニケーションの豊かさを支える言葉の効果(影響力)も認識された。第2節で行った考察により、グライスの「協調の原理」の4つの公理「量」、「質」、「関係」、「様態」の遵守は会話の基本であることを確認した形となった。第3節では第2節で取りあげた例を文学作品の中の会話として捉え、その考察を行った。文学作品の場合では、私たちは聞き手とは別の読者という位置に立つ。演劇の観客も朗読の聴衆も立ち位置は読者と同様である。読者は第三者であり、聞き手に同調しながらも、会話を俯瞰することが出来る。コンテキストにおける情報量は大方の場合に聞き手よりも多く、俯瞰した位置から会話を解釈することにより、「協調の原理」から離れた会話がある意味で愉しむことが出来る。話し手が意図して使う言葉の効果に翻弄されるのではなく、言葉の効果を愉しむことが出来る、それが聞き手の立場とは違う読者の立場なのである。

本稿により2つのことが確認出来た。現実の会話では、話し手の言葉が「協調の原理」を離れる程、聞き手の負担は増すことになりコミュニケーションは成立しにくくなる。文学作品の中の会話では、話し手の言葉が「協調の原理」を離れる程、読者は俯瞰した位置から「自分の解釈能力を発揮」し、会話を延

いては作品を愉しむことが出来る。グライスの「協調の原理」から離れた会話は、現実の会話では聞き手に負担を強い、文学作品の中の会話では読者に愉しみをもたらす、と考えられる。

Notes

本論中のシェイクスピアからの引用、幕場割り、行数等は、The Arden Shakespeare Series に拠る。

1. 「サンデー・モーニング」の日常言語の分析の手順は以下の様になる。

(1)ある哲学的主題が選ばれ、それと関連する語彙が収集される

(2)そうした語を含む正しい表現、また、そうした語が現れてもよさそうなのにそれだと正しくなくなる表現が収集される。

(3)そうした語や表現が正しく使えるような場合の「筋書き」が考案される。とりわけ、重要なのは、ある語が使えるのに、辞書ではその同義語とされている語が使えないような状況を考え出すことである。

(4)これらの作業の後に、収集された「データ」を説明できるような仕方で、問題の語や表現の意味を与えることが試みられる。(グライス 356-57)

2. Holinshed, Raphael (1529-1580), *Chronicles of England, Scotland, and Ireland* (vol.2, 1577, enlarged 87)、シェイクスピアは *Henry VI ,Part1,2,3* (1590-1,1590-2,1589-92)、*Richard III* (1592-3)、*King Lear* (1605-6)、*Macbeth* (1606)、*Cymbeline* (1607-8) 等、多くの作品でこの年代記を材源として使用している。(河合・小林 223、231-35)

3. 保護策 (Hedges) の定義としては、

“the speakers are not only aware of the maxims, but that they want to show that they are trying to observe them.” (Yule 39)

具体例としては以下がある。

Quality: As far as I know, they're married. (私の知る限りでは、)

Quantity: So, to cut a long story short, we grabbed our stuff and ran. (手短かに言いますと、)

Relation: This may sound like a dumb question, but whose hand writing is this? (つまり
ない質問に聞こえるかも知れませんが、)

Manner: This may be a bit confused, but I remember being in a car. (少し曖昧かもしれませんが、) (Yule 38-39 日本文筆者)

4. 接続詞 but の反義関係における推意は以下の様に暗示される。

(1) I like cats, but I don't like dogs. (反義関係が明確、好き⇔好きでない)

- (2) I like cats, but I don't have one as a pet. (but の前が推意、好き (だから飼っているはず) ⇔ 飼っていない)
- (3) I have a cat as a pet, but Mary has a dog as a pet. (but の後が推意、私は猫を飼っている ⇔ メアリーは犬を飼っている (から猫は飼っていない))
- (4) I like cats, but I live in a small apartment. (but の前後が共に推意、好き (だから飼っているはず) ⇔ 小さなアパートに住んでいる (から飼っていない)) (中本 18 参照)

Work Cited

- Shakespeare, William. ed. Harold Jenkins. *Hamlet*. London: Methuen, 1982.
- . ed. M. R. Ridley. *Otello*. London: Methuen, 1958.
- . ed. H. J. Oliver. *The Merry Wives of Windsor*. London: Methuen, 1971.
- . ed. Juliet Dusiberre. *As You Like It*. London: Bloomsbury, 2006.
- Yule, George. *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press, 1996.
- ウィルソン、ディアドリ・ウォートン、ティム (今井邦彦編 井門亮・岡田聡宏・松崎由貴・古牧久典・新井恭子訳) 『最新語用論入門 12 章』大修館書店、2009 年
- 河合祥一郎・小林章夫編 『シェイクスピア ハンドブック』三省堂、2010 年
- グライス、ポール (清塚邦彦訳) 『論理と会話』勁草書房、1998 年
- 小島義郎 『岩波ジュニア新書 273 コミュニケーションの英語』岩波書店、1996 年
- スコールズ、ロバート (富山太佳夫訳) 『記号論の楽しみ』岩波書店、1985 年
- 鈴木大拙 (上田閑照編) 『新編 東洋的な見方』岩波書店、1997 年
- チョムスキー、ノーム (井上和子・神尾昭雄・西川佑司共訳) 『言語論』大修館書店 1979 年
- 中本恭平 「接続詞 but で解明する *The Tale of Peter Rabbit* の物語構造」『国立女子大学文学部紀要』64 巻、17-27、KWUrepository、2018 年、Web (2018 年 7 月 14 日)
- ユール、ジョージ (今井邦彦・中島平三訳) 『現代言語学 20 章—ことばの科学—』大修館書店、1987 年